

1 Jomon Times

広報 縄文村だより vol.155 (1月号)

vol.155

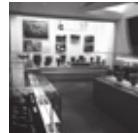
平成31年1月1日
●編集・発行●
奥松島縄文村歴史資料館
東松島市宮戸字里81-18
TEL 88-3927 FAX 88-3928



縄文村からのお知らせ

もうすぐ終了!
「特別展」をお見逃しなく!

ただいま、発掘100年を記念した特別展「里浜貝塚が明らかにした縄文時代」を開催中です。ぜひご覧ください。



1月20日(日)まで

臨時休館のお知らせ

誠に勝手ながら、1月29日(火)は館内メンテナンスのため、臨時休館いたします。

未来につなぐ宮戸のたから 講演会

はじめて世界一周をした室浜の漁師、儀兵衛・多十郎の話やロシア皇帝から賜ったジャケットなど若宮丸の漂流にまつわる話や語り、新宮戸八景・竹浜の鳴り砂など、宮戸の隠れたたからをご紹介します。

◆日時 平成31年1月26日(土) 12:30~16:00

◆場所 宮城県松島自然の家コテージ

◆内容

- ・紙芝居「新宮戸八景物語」
- ・報告「竹浜の鳴り砂と多十郎のジャケット」
- ・講演「はじめて世界一周した日本人」大島幹雄氏
- ・口演「若宮丸漂流物語」ダムじゃん小出氏

※11時からは観音寺で儀兵衛・多十郎の慰霊祭が執り行われます。

主催 儀兵衛・多十郎を語る会

「未来につなぐ奥松島のたから」再生活用実行委員会

協賛 奥松島観光ボランティアの会、

東松島市観光物産協会、観光奥松島の会、

協力 東松島市地域おこし協力隊、HXImagine

宮城県松島自然の家、

後援 東松島市教育委員会、

宮戸地区コミュニティ推進協議会

◆申込・問い合わせ先: 奥松島縄文村歴史資料館
☎0225-88-3927 (要予約)

新年 謹賀

旧年は「里浜貝塚発掘100年」を迎え多くの方に里浜貝塚のことを知っていただく1年となりました。今年もスタッフ一同元気にがんばります!よろしくお願ひいたします

2019年1月1日
奥松島縄文村歴史資料館一同



第一部では、里浜貝塚が日本考古学にどのような影響を与えてきたか、松島湾と関東の貝塚とでは貝塚の大きさや内容にどんな違いがあるのかなど、発掘成果をもとに、今後どのような活用ができるかについて、パネリストや会場から意見をいただきました。

11月18日、里浜貝塚発掘100周年を記念したシンポジウムを開催しました。パネリストに、阿部芳郎氏(明治大学教授)、會田容弘氏(郡山女子大学短期大学部教授)をお招きし、「貝塚を掘る!貝塚が解き明かす縄文の社会」をテーマに講演と討論を行いました。第一部に登場の會田氏は、当館の初代学芸員。大正時代から様々な人の手により発掘が続けられてきたこと、縄文村での自身が行った発掘の話をしていただきました。その後、菅原館長からは「里浜貝塚が明らかにした縄文人の暮らし」、阿部氏からは「関東地方の貝塚形成と生業」と題した講演が行われました。



里浜貝塚 発掘100年を 振り返る



11月25日、4月に種付けしたカキを取獲する「カキ養殖体験」を開催しました。半年前にカキ棚に吊るしたカキはどれくらい成長したのでしょうか?期待を胸に、カキオナーさん達は元気に出航しました。

漁師さんの手を借りて、海から引き揚げたカキがびっしり!「見たことがない海藻も着いているけど、スゴイ!」とホクホク顔。漁港に戻り、金槌を使って細からカキを外す作業は泥だらけになるほど大変!それでも、箱いっぱい採れたカキに笑顔になる皆さんでした。その後、史跡公園で試食会に♪

学芸員から鹿の角のハンマーと鹿骨のヘラを使った「縄文式カキ剥ぎ」を習い、いざ実践!苦戦しながらも「殻を割る道具と貝柱を外す道具が違わないで、縄文人は賢いなあ」と関心している様子でした。

近年、次々と明らかになっていく「縄文人の植物利用」の実態。現在の「編む」技術は、実は縄文時代に由来上がったもの!そんな縄文人になら、つるを採集しカゴを編むイベントを11月10・11日の2日間開催しました。初日は史跡公園の山でクズやアケビ、フジなどの「つる」を採集します。

「つるの場所や採集方法を知りたかった!」とやる気満々!土を這うつるを一生懸命追いかけていた。翌日、いよいよカゴ編みです。「こんなカゴが編みたい!」と、イメージする形を指してつるを編んでいます。なかなか思うように扱えないこともあったようですが、「ゼロから作り上げるのが楽しい!」と出来上がった時の達成感が良い!と大満足でした。



縄文人の 手仕事を体験する

もっと知りタイ! 地域おこし協力隊 〈第21回〉

■問 地域おこし協力隊事務局 復興政策課地域振興班 ☎内線1232



「また来たくなる東松島」に



観光振興 櫻谷ひとみさん(29)

私は仙台市内での勤め先を退職し、平成28年8月に移住して地域おこし協力隊になりました。昨年度まで一般社団法人東松島みらいとし機構(HOPE)に所属し、主に国内外からの視察研修の運営などを担ってきました。今年4月からは、野蒜市民センターの職員として勤務し、地域の皆さんにも少しずつ顔を覚えていただけようになっています。一方で地域おこし協力隊としての活動も両立して続けており、地域の観光振興に寄与する活動を展開しています。

宮城オルレ奥松島コースのオープンには、国内外の方々が東松島に足を運ぶ良いきっかけになったと思います。しかし、ファンやリピーターをさらに増やしていくためには、国内外からの観光客の皆さんが、「また東松島市にきたい!」と思えるような雰囲気づくりが必要だと感じています。その雰囲気づくりには、特に地域のご高齢の皆さんが一生懸命活動しているの、この活動をもっと若い世代の皆さんにも関わりを促していけるように、尽力していきたいと考えています。

私は仙台市出身ですが、街中ではなく山に囲まれた地域に住んでいたため、風光明媚な東松島の景色は大変魅力的に映ります。この景色が皆さんの誇りになり、東松島市のファンをもっと増やしていけるように、これからも励んでいきます。